

# テアトロ

9

2020

今月選んだベストスリー 313 林 あまり

## 特集【オーディションの功罪】

大西弘記／小池雅代／原田一樹

- 共創する空間へ③8 西堂行人
- 旅する演出家②2 流山児 祥
- 鈴木忠志論③ 菅 孝行

第33回テアトロ新人戯曲賞募集

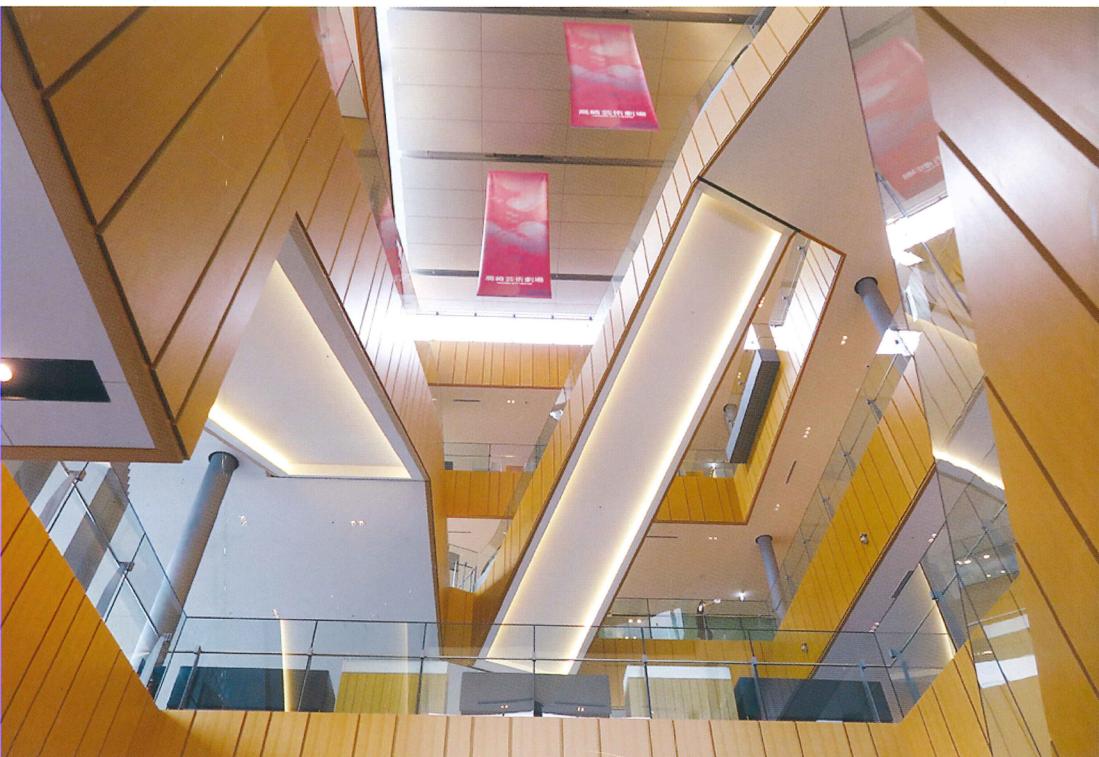
◆ 戯曲 ◆

### ラ・テンペスタ

原作／トム・ジョーンズ  
勝田安彦

### 蛇の巣

川口啓史



7月の  
関西

# 在宅で楽しむ演劇。そして劇場が開かれた

清流劇場【井原西鶴『世間胸算用』を読む】  
兵庫県立ピッコロ劇団

「トリ会議【晴れがわ】

【#またピッコロで会いましょうプロジェクト】

九鬼葉子

公演中止になつても、一緒に稽古ができるなくとも、劇団の人達が「止まつていな」ことが嬉しい。摸索しつつ、独自の方法で研鑽を重ねている。そんな便りが届くと、こちらも励まされる。

清流劇場は、俳優の語りのトレーニングと演出家・田中孝弥の新たな環境下での創作トレーニングを兼ねて、特別企画を実施。「井原西鶴『世間胸算用』を読む」がWEB上で動画配信された(6月5日開始)。

冒頭、代表の田中孝弥が登場。観客の安否を気遣いつつ、仕事が全部キヤンセルになり、新規依頼もない自身の

現状と、今回の企画立案に至つたきさつが語られた。流行り病にまつわる物語、ボッカッヂの『デカメロン』が企画の出発点。14世紀に大流行したペストから逃れるため、フィレンチエ郊外に引きこもつた男女10人が、退屈しのぎに物語を一人10話ずつ語るという構成。今の状況と重なる。当初、同作を語ることを考えたが、この機会に、普段、清流劇場で行つていない、日本の作家の作品にチャレンジすることとし、「世間胸算用」を選んだ。これもある意味現在と符合する。田中自身が「今年は年が越せるのだろうか」と不

安に思つてゐる時に出会つた、まさに「年越し話」の短編集。商いの総決算日である大晦日の、おもに商人達の様相が描かれる。貧困層にとつては、支払いできるかどうかは、生きるか死ぬかの一大事。江戸時代の格差社会の中での、やりくり算段が展開される。お金だけでなく、心のやりくりも含まれ、當時の大みそかの風習や生活の匂いとともに描写された。

3つの物語が語られた。『鼠の文づかひ』(出演・日永貴子、倉増哲州)は、

けちな老婆が主人公。彼女には、年も越せないほどの気がかりがあった。今

年の正月に妹からもらつたお年玉が盗まれ、それを探すために呼んだ祈祷師もインチキで、金を巻き上げられたと言う。近所の医者の機転で、鼠が持ち去つたことが判明。屋根裏で金は見つかるが、老婆は、息子が鼠を飼つていたせいと言いがかりをつけ、利息を巻き上げる。風刺のきいた物語。俳優達のおつとりとした口調が、昔語りを聞く楽しげ、豊かなを体感させた。

『小判は寝姿の夢』(出演・田中K-1、永津真奈)

は、貧乏な若夫婦の話。金に窮した亭主が、よこしまなことを考へるが、女房が「互いの心さえ変わらなければ、行く末は遂げられる」と、奉公に出る決意をする。乳がよく出る女房に、乳母の仕事が見つかり旅立つ。だが母を失い、泣き止まぬ幼子を抱え、亭主は一層困窮。さらに奉公先の主人が好色家と聞き、飢え死にも辞さない覚悟で妻を取り戻しに行く。けなげで少し色っぽい若女房と亭主の絆が伝わり、艶めかしさを表出した。

『平太郎殿』(出演・高口真吾、日永

貴子)は、大みそかに法話をするはずだった寺の住職が主人公。だが参詣に来たのは、たつた3人。3人相手では燈明の油代にもならぬと、うまく言い含めて帰らせようとする。すると、3人が寺に来た事情を話し始める。老婆は、借金取りに追われる息子が、母(老婆)が行方不明になつたことにしで、借金から逃げようと計画、寺に隠れるために来たとのこと。他の二人も金に窮して行く当てもないだけ。信仰

心で訪れた者は一人もいなかつた。住職は、人の世の不条理に思いを馳せる。そこへ近所の人達から、子供の誕生や、借金が原因で首をくくつた男の葬式の依頼などが慌ただしく舞い込む。さらには、寺一番の檀家の一人息子が、放蕩の末、勘当されたとの知らせも。「暇なものとされる師走坊主も、暇のないことであつた」でオチとなる。落語を聞くような、粹な語り口の逸品。

しぐさや表情も大きく、またピアノ演奏(仙波宏文)で、鼠の走る音や、朝日の差し込む情景を描写。追い詰め